

で、新聞などにも折々見えるといふ話なんですが、  
 又一方を見ますと、夜は寝ないで、こうやつて私  
 所の車なんぞ引いて、お金を儲けてそれで書になる  
 と御休みもなさらないで毎日學校に出て御稽古なさ  
 るといふなんざあ、すばらしい剛氣な書生さんじゃ  
 わりませんか。それで、どうか、こんな書生さんのお  
 話を、ねー旦那、あの道樂書生さんたちに、聞か  
 してやつたらと思つて居りますのでへえ」

今しも、彼が、親分的俠氣を以て、まさに、満腔の  
 氣焰を吐き出さんとせる時、またく玄關に賀客の來  
 訪せるありければ

「いや、どーも大變に長座を仕りまして……」  
 なる一語を残し匆々にして立ち歸りぬ。

(完)

夜の梅

東くめ  
 夜寒の風の  
 吹み入りし、  
 冬をつらさを  
 忘れよと、  
 ひまもりて、  
 かよふなり、  
 かをるまで。

母を戀ふ

さくら  
 「父母より遠く遊ばず」の  
 聖のをしゑ打とひき  
 吾妻の空をこゝろざし  
 出しは去年の夏なりき  
 三百里外に母はわり  
 去年の葉月の末つかた  
 馴れし家をば立ち出で、  
 又の旅寢のかりまくら  
 孝養の日は終になし